大学院における
サービス・ラーニングを取り入れた
プロジェクト型教育の試み

—「東日本·家族応援プロジェクト2011～2013」の成果と課題—

2015年2月

立命館大学大学院応用人間科学研究科
村本邦子
中村　正

刊行にあたって

2011年3月11日、東日本大震災が起こったのは、対人援助の科学の創造を掲げてスタートした応用人間科学研究科（Graduate School of Science for Human Services）が十周年を迎えようとしていた時だった。時代の要請に応答しつつ再帰的に臨床の知の体系化を志している大学院として、果たすべき社会的責任があるのではないか。当時、副研究科長をしていた私は、自分達にいったい何ができるのか考えてみたが、二十数年、トラウマ臨床を実践してきた自分の経験を踏まえると、遠方にいる私たちにできることは、被災と復興の証人（witness）として存在し続けることに尽きるのではないかと思い到った。

そんななかから、この「東日本･家族応援プロジェクト」が生まれた。細く長く、まずは十年、東北各地に定点を定め、現地の機関と協働して、ささやかな対人援助の舞台設定をする。そこを足掛かりに起こる出会いは、「支援する／される」関係を越え、互いに影響を及ぼしあって、新しく豊かな物語が生み出されていくものでなければならない。経済効率に照準を合わせてきた直線的な戦後の復興の過ちは、バブル経済の崩壊で露呈し、今回の震災で完全に底をついた。日本というシステムは、根源的なところで問い直しの必要を迫られている。ここから先の復興は、東北を中心に、螺旋を描きながら、私たちの方こそ周辺に位置取るべきなのではないか。参与する証人となることで、私たちの対人援助学も変容していくことだろう。さらに、ここに院生たちを巻き込むことで、想像だにしなかった対人援助学の未来が拓けるに違いない。

このたび、3年間の取り組みをサービス・ラーニングの視点から振り返り、今後の課題を整理してみた。ご協力頂いている現地のみなさま、関係者のみなさまへの感謝とともに、まずは成果報告としたい。

2015年1月31日　村本邦子

1　はじめに

応用人間科学研究科（Graduate School of Science for Human Services）は、2001 年、対人援助学の創造を掲げて誕生した。開設十年目にあたる 2011 年 3 月に起こった東日本大震災を受け、研究科として何かすべきではないかとの声が上がり、教職員と院生が一緒に活動する「東日本・家族応援プロジェクト」を立ち上げた。このプロジェクトは、家族療法家であり漫画家でもある研究科教員、団士郎の家族漫画展に対人援助的なプログラムをセットして、東北四県を毎年巡回し、現地の対人援助機関と協働しながら、コミュニティの力を引き出す働きかけをしようというものである。十年間継続することで、被災と復興の証人（witness）となることを目指してもいる。

対人援助学においては、研究と実践を還流させ、プラクシス（Praxis）として融合しようとするが、ここに院生を参入させ、研究・実践・教育を一体化することを試みてきた。このプロジェクトは、いわゆる「心のケア」などのように、特定の人々に向けた特定の活動を目的としたものではなく、コミュニティ介入のひとつの装置であり、オープン・システムとして現地の人々との多様な関わりの可能性を開く。院生たちにとっては、教員とともに現場実践を経験しながら、研究科の 3 つのディプロマ・ポリシー、⑴対人援助を科学的・総合的にとらえるための専門的知識の習得（知識・理解）、⑵対人援助の実践と理論を相互還流させてとらえる高度な専門的技能と対応力の習得（技能・表現）、⑶人びとのニーズを社会へ向けての権利擁護の姿勢をもってとらえ、新しい対人援助の創造に高い志をもって挑戦する意欲の向上（価値・姿勢）を学ぶと同時に、自分なりのテーマや課題を見つけ、省察しながら対人援助の実践と研究を展開していく対人援助学の学び方を学ぶチャンスとなる。

サービス・ラーニングは、「サービスの提供者と受け手（人間、社会、環境）の両方の変化を意図して、サービスの目標と学習目標を結びつける取り組みである。それは、自己の振り返りと自己発見、そして価値観・技能・知識の獲得、理解と社会課題の解決を果たす体験が同時に果たされるように良く練られたプログラムである」（National Service-Learning Clearinghouse）」とされるが、研究科では、このプロジェクトへの参加を大学院レベルのサービス・ラーニン

グを取り入れたプロジェクト型教育と位置づけ、ヒューマン・サービス領域における新しい教育の取り組みとしてその方法を確立したいと考えている。なお、本プロジェクトについては、2014 年 5 月の国際心理療法学会でも報告した（Muramoto, Nakamura & Dan, 21th IFP World Congress of Psychotherapy 9th May, 2014.Shanghai, China）。本論文では、三年間の取り組みを振り返り、その成果を評価するとともに、今後の課題を明らかにする。

2　サービス・ラーニングとしてのプロジェクト概要

本プロジェクトでは、教職員と院生が 6 ～ 10 名程度のチームを形成し、東北四県のコミュニティにおいて、現地の対人援助機関（公的・民間含む）と協働し、家族漫画展および対人援助プログラムを実施すると同時に、東日本大震災の影響と回復の証人（witness）として記録を蓄積していく。2011 年より毎年、9 月から 12 月まで各月最初の週末、青森、宮城、岩手、福島にて、定期的にプロジェクトを実施する。現地でのプログラム実施は分担するが、事前調査、企画、プロジェクト実施、報告会、HP での情報発信というプロセスを共有しながら学習を深め、2 月にはシンポジウムにて成果報告を行い、学びを振り返る。1 年の流れを図 1 に示す。

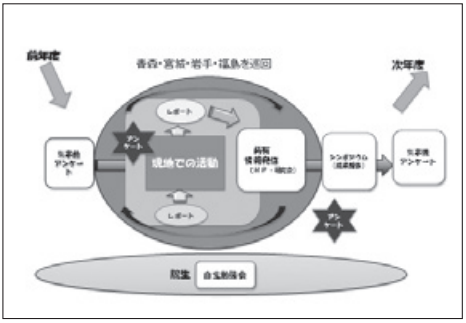

図 1　サービス・ラーニングの流れ

サービス・ラーニングとしての目的は、参加した院生が、①現地の人が直面している課題、状況を説明することができる　②現地で見聞きした状況について学術的理論を交えて説明することができる　③震災プロジェクトでの経験により、自分の研究テーマを深めることができる　④報告会で現地での経験、考えを報告することができることである。評価の方法は、①企画参加者へのアン

ケート（実践の評価）②院生へのアンケート（学びの評価）③院生報告のアンケート結果（研究の評価）の三点を総合し、次年度に向けた検討を行う。なお、本プログラムは、被災地支援を目的に開始し、サービス・ラーニングとしての形を徐々に整えてきたため、毎年、改善を加えることで現在の形となったものであり、この形が完成したのは 2013 年度である。

なお、すでに実施した現地プログラムの実施状況は、表１のとおりであり、プログラムの内容は図２のとおりである。

表１　現地プログラム実施状況

2011年度	2012年度	2013年度
青森県むつ市 （9. 19−9. 24）	青森県むつ市 （9. 3−9. 9）	青森県むつ市 （8. 31−9. 8）
	宮城県仙台市 （10. 1−10. 6） 宮城県多賀城市 （10. 7）	宮城県多賀城市 （10. 1−10. 27）
岩手県遠野市 （11. 1−11. 6）	岩手県遠野市 （11. 2） 岩手県大船渡市 （10. 22−11. 3）	岩手県宮古市 （11. 1−11. 3）
福島県福島市 （11. 29−12. 4） 福島県二本松市 （1. 28−1. 29）	福島県福島市 （11. 26−12. 2） 福島県二本松市 （11. 5−11. 21）	福島県福島市 （12. 1−12. 8） 二本松市 （11. 11−11. 17）

＋京都（2012.8.17-8.20と12.11/2013. 10.10-10.13）

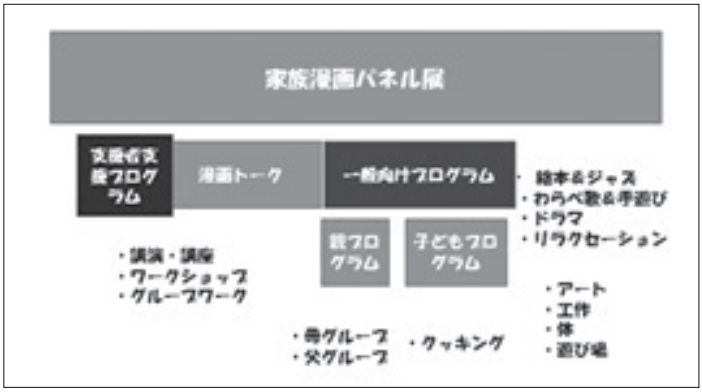

図２　プログラム内容

東日本・家族応援プロジェ
復興支援

むつ

in むつ

●団 士郎家族漫画展

●家族応援セミナー
団 士郎の漫画トーク～「木陰の物語」の物語

●支援者支援セミナー
長続きする家族支援のために

●お父さん応援セミナー
父と子の絵本ワークショップ
パパすてき！にします。

●キッズセミナー
パン作り

宮古

遠野

大船渡

in 仙台

●団　士郎家族漫画展

●家族応援セミナー
団士郎の漫画トーク
～「木陰の物語」の物語

●支援者支援セミナー
長続きする家族支援のために

多賀城

仙台

福島

二本松

in 福島

●団 士郎家族漫画展

●家族応援セミナー
団 士郎の漫画トーク～「木陰の物語

●支援者支援セミナー
長続きする家族支援のために
支援者のためのドラマ表現ワークシ

●遊びのワークショップ
風船で遊ぼう
みんなで楽しく劇遊び
クリスマスカレンダーを作ろう

京都

in 京都

●団 士郎家族漫画展

●家族応援セミナー
団 士郎の漫画トーク～「木陰の物語」の物語

●プロから学ぶ「気持ちの整え方」

●くこれからの自分をつくるための
「キャリアの棚卸し」セミナー>

in 二本松

●団 士郎家族漫画展

●子育て支援セミナー
就学前までの子供の発達の姿と関わり方
子どもは遊びの天才ー幼児期・学童期の遊びと発達ー
保護者のためのグループ交流会
子育てトーク：親と支援者の集い

●支援者支援セミナー
支援者のためのグループ交流会
ーフォーカシングの技法を用いてー

●親子向けわくわくワークショップ
ものづくり

●安達仮設住宅訪問プログラム
保護者向けリラクゼーション
遊びのワークショップ
おとな向けストレス解消法

●食育のワークショップ<安全で・楽しく・おいしく！>

クト ～2011▶2013～
活動紹介

in 宮古

●団 士郎家族漫画展
●家族応援セミナー
　団 士郎の漫画トーク～「木陰の物語」の物語
●支援者支援セミナー
　長続きする家族支援のために
●うたと遊びのワークショップ
　みんなでうたおうヤッホッホー
　アートで遊ぼう

in 遠野

●団 士郎家族漫画展
●家族応援セミナー
　団 士郎の漫画トーク～「木陰の物語」の物語
●支援者支援セミナー
　長続きする家族支援のために
●遊びのワークショップ
　みんなで楽しく創遊び
　風船で遊ぼう

in 大船渡

●団 士郎家族漫画展
●家族応援セミナー
　団 士郎の漫画トーク～「木陰の物語」の物語
●支援者支援セミナー
　長続きする家族支援のために
●遊びのワークショップ
　風船で遊ぼう
　アートで遊ぼう

語」の物語

ョップ

in 多賀城

●団 士郎家族漫画展
●家族応援セミナー
　団 士郎の漫画トーク～「木陰の物語」の物語
●支援者支援セミナー
　長続きする家族支援のために
●ピクチャーヒーリング
　～絵本とJAZZのコラボレーション

青森県むつ市
2011年9月19日～24日……むつ市市立図書館
2012年9月3日～9日……むつ市市立図書館
　　むつ市中央公民館
2013年8月31日～9月8日……むつ市市立図書館
　　むつ市中央公民館

宮城県仙台市
2012年10月1日～10月6日……エル・ソーラ仙台

宮城県多賀城市
2012年10月7日……多賀城市公民館
2013年10月1日～27日……多賀城市立図書館
　　多賀城市公民館

岩手県遠野市
2011年11月1日～11月6日……遠野遠の遠ギャラリー
2012年11月2日……遠野市白岩児童館

岩手県大船渡市
2012年10月22日～11月3日……大船渡市民交流館
　　「カメリアホール」

岩手県宮古市
2013年11月1日～3日……おでんセブラザ
　　清寿荘地区仮設住宅集会場

福島県福島市
2011年11月29日～12月4日……福島市市民活動サポートセンター
　　（チェンバおおまち）
2012年11月26日～12月2日……福島市市民活動サポートセンター
　　（チェンバおおまち）
2013年12月1日～8日……福島市市民活動サポートセンター
　　（チェンバおおまち）

福島県二本松市
2011年1月26日～1月29日……二本松市市民交流センター
2012年11月5日～11月11日……二本松市市民交流センター
　　安達運動場応急仮設住宅
2013年11月11日～17日……二本松市市民交流センター
　　安達運動場応急仮設住宅

京都府京都市
2012年8月17日～20日……ウィングス京都
2013年10月10日～13日……ウィングス京都ほか

立命館大学大学院応用人間科学研究科　東日本家族応援プロジェクト代表　村本邦子

3　サービス・ラーニングの経過

3.1　2011 年度のプロジェクト概要と院生たちの学び

東日本大震災が発生した初年度である 2011 年には、院生 6 名、教員 7 名、職員（心理教育相談センター・カウンセラー 2 名を含む）3 名がプロジェクトに参加し、現地にいる修了生 1 名も部分的に加わった。実施に先立って、7 月にはシンポジウムを開催し、震災後初期段階の現状を学ぶと同時に、大学の役割について議論した。被災地の状況は混沌としており、各地でプロジェクトを実施するだけで精一杯だった。宮城での実施は実現せず、9 月青森、11 月岩手、12 月福島でプロジェクトを実施し、10 月と 2 月に報告会を実施した。11 月には、被災地で活動をしている支援者たちとともに、アメリカ、中国、ベトナムからもゲストを招き、対人援助とコミュニティ介入や中長期に向けての支援のあり方について議論した。2011 年度プロジェクトのスケジュールは、表 2 のとおりである。

表2　2011年度プロジェクトのスケジュール

2011 年 7 月 2 日	シンポジウム「東日本大震災と大学の役割 ～応用人間科学研究科に期待されること」
9 月 19 日～ 24 日	「東日本・家族応援プロジェクト in むつ」
10 月 11 日	第 1 回報告会
11 月 13 日	国際シンポジウム「対人援助者がコミュニティに入るとき～持続的な復興支援を目指して」
11 月 1 日～ 6 日	「東日本・家族応援プロジェクト in 遠野」
11 月 29 日～ 12 月 4 日	「東日本・家族応援プロジェクト in 福島」
2012 年 1 月 23 日～ 29 日	「東日本・家族応援プロジェクト in 二本松」
2 月 3 日	第 2 回報告会

現地でのプロジェクト参加院生には、事前レポート、フィールドノート、活動報告書、HP 用原稿の提出を義務づけたが、アンケート等は実施しなかったため、活動報告書より院生の学びが読み取れる部分をピックアップして分析した。院生たちの学びは、①被災地の状況理解　②対人援助職者としての学び　③プロジェクトの意味の三つに大きく分けられた。

ひとつ目は、マスメディアを通じてはわからない五感を通じた被災地の状況理解である。複数の院生がこれを「肌感覚」と表現したが、「被災地で迎える夜の暗さ」「石柱が川に落ちていたり、柵が途中でなくなってしまっていたり、マンションらしきものの基礎の鉄骨が折れているだけでなく、流れるように曲がっていた。津波の引きの強さを実感した」「今なお民家が少なく、復興が追いついていない現状を再確認した」「新聞やテレビからは見えないそこにある悲しさ･淋しさ･怒り…そのようなものを肌で感じた」など、「被災のインパクト」を指摘すると同時に、「工場がすでに稼働しているなどのような力」「帰路会った女子高校生の笑顔、夜の道路で渋滞している車、真っ暗な空に力強く上がる工場の煙突からの煙、11 月中旬オープンの店舗看板…から復興の息吹・人間の力強さも感じることができた」など、全員が「復興への兆し」に着目していた。「単純な人的被害や建築被害だけでなく、さまざまな形で人々が影響を受けていること」に被災の複雑さを感じ、「予想外のイルミネーションの明るさに自分たちを元気づけようとする意思を感じた」といった指摘もあった。外から「被災地」へ入った者の投影とも言えるが、それぞれが震災後半年の被災地の状況

を身体感覚として刻んだことは対人援助職者としての将来に何らかの影響をもたらすことだろう。

二つ目は、現場でさまざまな援助職者と協働しながら見えてくる対人援助職者としての学びである。たとえば、子どものプログラムを手伝いながら、児童相談所のスタッフの対応に学んだり、教員の手伝いをしながら授業で習った技法をどのように現場に合わせて応用するのかを学んだりなど、実践を通して対人援助職者としてのスキル向上、また、専門職者に見えていないものを見たり、場の設定に対する評価や今後にむけた提案をするなど批判的視点も確認された。多職種と協働することの意味を捉えているものもあった。

三つめは、本プロジェクトの意味を実感したり、考察したりすることである。とくに、被災地の人々と話すことで、証人（witness）であることの意味や、十年続けるという意思表示を行うことがもたらす意味について納得したというものであり、初年度ということもあって、最初に設定された意図を越えるものは見当たらなかった。

初年度は、全体的に、東日本大震災がもたらした破壊的影響に圧倒されながら、シンポジウムで被災地の支援者の話を聞いたり、議論したりしながら、研究科として何ができるかを模索することにエネルギーを取られた一年だった。次年度からは、もう少し余裕を持って、研究会や報告会の機会を増やし、実践の振り返りのための時間を取ることにした。

3.2　2012 年度のプロジェクト概要と院生たちの学び

2012 年度の参加者は、院生 9 名、教員 7 名、職員 5 名、修了生 1 名であった。宮城での実施が実現したが、岩手での実施場所を再検討することになり、結果的に、9 月青森、10 月宮城（仙台と多賀城）、11 月岩手（遠野と大船渡）、12 月福島（福島と二本松）でプロジェクトを実施、また、2 年目からは、特定非営利団体きょうと NPO センターとの協働で、京都にいる避難者向けのプログラムを加えることになった。それぞれの開催地でのプロジェクト後に 7 回の研究会・報告会、2 月にシンポジウムを実施した。2012 年度のスケジュールは表 3 のとおり。

表３　2012 年度プロジェクトのスケジュール

2012 年 6 月 26 日	第 1 回研究会
7 月 10 日	第 2 回研究会
8 月 17 日～ 21 日	「東日本・家族応援プロジェクト in きょうと」
9 月 3 日～ 10 日	「東日本・家族応援プロジェクト in むつ」
10 月 1 日～ 7 日	「東日本・家族応援プロジェクト in 宮城（仙台 & 多賀城）」
10 月 3 日	第 3 回研究会・報告会
10 月 10 日	第 4 回研究会・報告会
10 月 22 日～ 11 月 3 日	「東日本・家族応援プロジェクト in 岩手（遠野 & 大船渡）」
11 月 5 日～ 11 日	「東日本・家族応援プロジェクト in 二本松」
11 月 14 日	第 5 回研究会・報告会
11 月 26 日～ 12 月 2 日	「東日本・家族応援プロジェクト in 福島」
12 月 5 日	第 6 回研究会・報告会
2013 年 2 月 10 日	シンポジウム「東日本大震災と対人援助」

２年目となり、サービス・ラーニングとしての課題を整理し、院生たちには、現地でのプロジェクト参加にあたって、初年度同様、事前レポート、フィールドノート、活動報告書、HP 用原稿の提出を義務づけることに加えて、一年間の学びを振り返るサービス・ラーニング院生アンケートを実施した。アンケートの質問項目は、　1. 参加したもの　2. 主観的評価（①参加動機　②被災地理解　③対人援助の専門性　④連携と融合　⑤地域との協働　⑥権利擁護　⑦自己成長）とさらに学びを深めるために必要と思うこと　3. プロジェクトの評価（後輩に勧めるか･もう一度参加したい･成長に役立ったか）　4.改善点である。達成度の自己評価とともに、その理由、それを向上させるためにできることを記述させ、回答しながら改めて自らの学びを省察させる機会とした。以下にアンケート結果を紹介する。

１）参加目的

９名の参加院生の内訳は、対人援助学領域が４名、臨床心理学領域が５名であり、ストレートマスターが３名、社会人院生が６名だった。自由記述された目的は、①被災地への素朴な思い　②専門家として成長　③ボランティアの継続　④風化への抵抗　⑤研究科のミッションへの共鳴の５つ分類された。目的達成度は、平均 6.6（10 点満点）だった。

一番目の「被災地への素朴な思い」は３名が挙げており、「震災直後から、何かしたいという思いはあったが自分に何ができるのかわからず、何もしないままだったため、プロジェクトに参加することで何かできると考えた」や「被災地の状況を肌で感じる必要があると思っていたから」などというものであり、関わりたい思いを持ちながらもきっかけがつかめないままであった層にとっては、研究科のプロジェクトが被災地と関わることのできる機会を提供していた。これらの層は、とにかく被災地へ行ったことで、自分なりに考え始めることができたという感想とともに、継続的に関わることの意味を感じていた。

二番目の「専門家としての成長」は臨床心理学領域の２名が挙げており、「大規模災害に直面した人々の心理やその変化を学ぶことのできる機会は少なく、心理臨床家として成長出来ると考えたから」「災害のトラウマ研究に関心があり、災害から１年たった町の支援者支援として何ができるのか、またどのよう

にしてそれを継続して行けば良いのか学びたい」というものだった。結果として、現地の人々と触れ合うことで、どのような支援が役立つのか理解することができたという感想とともに、ここでも継続の必要性が強調されていた。

三番目の「ボランティアの継続」は３名が挙げた。うち１名は昨年度のプロジェクト参加者である。残る２名は、入学前、何らかの形で震災ボランティアに関わったことのある社会人院生で、継続のチャンスと捉え、今度は研究科の教員や院生と一緒に考えたいと述べられていた。

四番目の「風化への抵抗」を挙げたのは１名であり、阪神淡路大震災の経験から、「だんだん震災関係のニュースが少なくなっていくなかで、実際に現地はどうなのか、自分で見て肌で感じ、遠く離れた関西にいる人にも伝えたい」と考えていた。現地に行ったことで、もっと現地の人々と交流したいし、自分自身でもフィールドワークの時間を確保したいと意欲を示した。

五番目の「研究科のミッションへの共鳴」には３名が触れており、入学式で研究科長が「2011 年度に入学したことには意味があるはずだ」と語ったことに影響を受けていた。プロジェクトの HP を見て、十年のプロジェクトとあることから、支援へのコミットメントに対人援助学の意味を感じ、プロジェクトに参加したいと入学を決心したという院生もいた。

２）被災地理解

プロジェクト参加によってどの程度、被災地理解を深められたかに関する自己評価は、平均が 7.0（10 点満点）であり、評価の高かった者としては、事前レポートでの学習やフィールドワークを通じて、現場の実情とマスメディアでの報道との差異を感じたことによるものであり、低かった者は、逆に、「ある程度のことを知り、自分が知ったことがほんの一端であることがわかったため」というものだった。

３）対人援助の専門性

対人援助の専門性に関する理解の自己評価の平均点は 5.1（10 点満点）であった。「対人援助を学び、実践していこうとする上で大切なことに気がついた」というものもあったが、「今回は初めての経験だったので、専門性を深めると

いうより、人間として圧倒されるところが大きかった」という声や、「専門性を深めることはできなかったが、どのような視点が必要かということは感じた」ということだった。改善のために「何を目的として行くのかを自分の中で明確にして、専門的な部分でわからないことがあれば事前に先生方のところに行って自分から吸収するようにする」などが挙げられた。なお、評価の低かった1名は、「専門性を深めることは意識の範疇外」で「とくに改善点はない」としており、他の項目についても言えるが、この院生にはサービス・ラーニングとしてのプロジェクトの趣旨が届いていなかったと思われる。

4）連携と融合の理解

研究科が重視する理念である連携と融合の理解についての自己評価は、平均点が6.6（10点満点）であった。評価の高かったものとしては、「プロジェクトの主旨を理解したいと思い、一緒に活動をする人たちと話を共有したいと思った。一人ひとりの思いがプログラムに反映され、そこから現地の方にも伝わっているのではないかと思える場を見たからだと思う。また、修了生との繋がりから活動についても共有できた」「このプログラムを通して被災地で活躍している支援者に会うことができた。その中で人的ネットワークの確立が何よりも復興を助けることを学んだ」など、多様な専門職種で構成されたプロジェクトの一員として活動することで、連携と融合の意義が実感された場合が多かった。評価の低かった者の具体的理由は明確ではなく、プロジェクトへのコミットメントの違いを表していると思われた。

5）地域との協働の理解

地域との協働の理解についての自己評価は、平均点が5.6（10点満点）であり、高かったものとしては、「地域との協働の必要性とその難しさを学んだ。東北の地域性に馴染がなく、先方の対応に少々戸惑うこともあった。地域文化を理解すること。そのためにも、同じ地域を毎年訪れることの大切さを感じた」「地域で活動している方々が最もよく対象者のことをご存じだということを感じた。現地のスタッフだけではできないことを、現地以外のスタッフと一緒に連携して行うことで、色んなことが可能になるということや、現地にいると見え

ないこと、また現地でないと分からないことも、協働することで気づきあうことができることが分かった。それが、色んな人の繋がりを産むと感じた」などが挙げられていた。低かったものとしては、「地域との協働の理解を深める機会自体を感じなかったため」というものがあった。

6）権利擁護（アドボカシー）の理解

権利擁護（アドボカシー）については、平均が 4.9（10 点満点）であり、全般的に「権利擁護（アドボカシー）についてあまり意識せず参加してしまった」という反省の声が多く、プログラム提供側の導入の仕方に改善が求められる結果となった。他方、「振り返って考えてみると、被災地の人たちの語りなど、現地で見聞きし、感じ、考えたことを伝え、発信していくことが、被災された方に対する理解や支援の広がりにつながっていくということがアドボカシーの 1 つになっているということが理解できた。アドボカシーまで含めて支援を考えるという視点を学ぶきっかけになった」「被災から生活を取り戻していくスピードや取り戻し方は、人それぞれであるが、すべての人が擁護される権利を持っているということを考えることができた」「最初はこんな離れたところにいる私たちに何ができるのかと思っていたが、よそ者の私たちが『あなたがなさっていることはすごいことですよ』と確信することによって、エンパワーされ、自ら次のステップを踏んで行かれる被災地の方々がいらっしゃることに気づいた」など、方向づけがなかったからこそ、多面的な洞察が得られた側面もあったようである。

7）自己成長について

自己成長に関する自己評価は、平均が 6.6（10 点満点）だった。評価の高かったものとしては、「何かの問題に対して関わる対人援助ではない対人援助について考えたかったという自身に気づくことができた。周りの人のおかげで意味づけられるようになり、これを言葉にして言えることが自己成長だと思う」「前に抱いていた先入観（「心理的支援」という枠がかたいものがあると思っていた）や一方的な考え方を見直すことができた」「このプロジェクトに対する先生方の努力には本当に頭が下がる思いがした。お忙しい中、時間と労力を惜

しまず駆け回られる先生方からとても多くのことを学んだ」などがあり、低いものとしては、「成長に結びついていることは間違いないと感じている一方で、自己成長のために参加したわけではないことと、その成長が表面的に実感できるものではないと感じているため」というものがあった。

8）院生によるプログラム評価

院生によるプログラム評価は５点満点で、　①後輩に勧めるか 4.4　②もう一度参加したいか 4.3　③成長に役立ったか 4.4 と満足の高い結果が得られた。自由記述欄には、「自分次第で大きく成長できるプロジェクトだと思う。私自身は中途半端な形での関わりになってしまった気がするが、後輩にはぜひ勧めたい」「対人援助職の卵として、自分の考えを持っておくべきこと、捉えておくべきことを多く学ぶことが出来たと考えている。震災復興支援という切り口ではあるが、そこから臨床場面に般化しうる体験をすることが出来る」「対人援助学を学ぼうとしているならば、知っておくべきことだと思うし、できるならば一度現地に行って感じ考えることでいろいろ気づきがあると思う。十年プロジェクトの一端に関わらせていただいたからには、最後まで責任をもってかかわりたい。広く動いて地域に貢献することが専門家の仕事の１つだと思う」など、評価の理由が挙げられた。

改善点としては、「年度毎にどういった企画を行ったのか、それに対する反応はどうだったのかなど、各土地の経年変化が分かるような資料があれば、以前に参加していた者がどういった思いを抱いたのか、何が明らかになったのかなど、文脈を共有することが出来ると考える」「事前研究会、事後報告会、フィールドワークは良かったが、院生の関わり方には改善点がある。まず行くこと、行って感じ考えることも大事だが、もう少し主体的に関ろうという意識と行動が必要だと思う。事前の研究会で、小グループのディスカッションの時間があるだけでも違うと思う。たとえば事前レポートの共有や議論、当日のプログラムを見て趣旨や関わり方を考える、現地ゲストの方のお話を聞いての感想共有など。負担が大きすぎると参加しにくくなるかもしれないが、個々人の主体性に任せる仕組みとして何か組み込めるといいと思う」など、次年度から活かせそうな具体案が挙げられた。他方、現地での参加者の少なかった地域につ

いての問題提起があり、プログラム設定に関する改善も求められた。

9）院生の成果報告から

2月のシンポジウムでは、被災地の支援者を招いて議論する機会を持つとともに、プロジェクト参加院生3名が学びの成果報告を行った。ここでは、そのなかの一人である臨床M2の社会人院生で、2年目の参加者の学びのナラティブを紹介する。

大学院入学の1か月前に東日本大震災が起こり、4月の入学式で、研究科長が「2011年度に入学したことには意味があるはずだ」とおっしゃった。授業でも震災のことがテーマになることが多く、対人援助学を学びはじめた院生同士で、自分たちに何ができるのだろうかと語り合った。一方で、日々の忙しい自分の生活で忘れていってしまうことの罪悪感と、どのように関わったらいいのかわからないまま時間が過ぎていく中で、研究科でプロジェクトが立ち上がることを知り、参加を決めた。対人援助学を学んでいこうとしている自分にとって、「今行かなくていつ行くんだ」という思いがあった。何ができるかわからなかったが、それを考えていくためにも現地を見て、生活している人と出会い、繋がりたいと思ったのが最初の動機だった。

2012年度は、「来年も来ます」という約束を守り、再会したい気持ちと、1年経って現地や生活されている方たちの声を聴きたいと思ったこと、1年目はとにかく参加するだけだったが、2年目はただ参加するだけではなく、このプロジェクトの意味をもっと考えて関わりたいと思い、参加した。2年続けて参加したのは福島で、今年度は仙台、多賀城でのプログラムにも参加した。

1年目の福島での支援者支援セミナーでは、現地の支援者たちが、いかに日々苦悩しながら、助けを求めてくる人々に対して誠実に向き合おうとしているかを実感した。放射能がもたらした影響は想像以上であり、深く考えていなかったことを申し訳なく思う気持ちがわいてきたが、今ここで現実を「知る」ことから目をそらさずにいようとその場にいた。2年目は、「状況は悪化しているかもしれない、参加者の語りはもっと重いものになっているかもしれない」と思いながら参加したが、違っていた。「昔には戻れないから、ここで新しいコミュニティをつくっていくんだ」「支援対象者である自分では動けない。支援される身ではなく自分で動きだせるものがあれば」と人々の覚悟を感じ、人が困難や逆境を跳ね飛ばす力を感じた時間だった。とにかくお話に耳を傾けること、一緒に考えていけることがあれば考えていこうという思いでその場にいたが、大きな目的を共有しながら、現地にいるからこそできる支援者と、外から来るからこそできる支援者が協働することで、視野が広がったり新たなアイディアが生まれたりするように感じた。

福島の子どもプログラムでは2年続けてクリスマスカレンダーづくりをしたが、昨年参加

された支援者が今年も参加されていて、「去年体験させてもらったクリスマスカレンダーづくりがすごく良くって、仮設住宅でもやらせてもらったんです」と話してくださった。こちらが準備していったプログラムが、現地支援者の手で広まっていったというのが、とてもうれしかった。完成されたものを持ち込み、その日だけプログラムをやって終わりではなく、現地の支援者や地域の人が関わることで、初めて完成され、そこからさらに広がっていくようなプログラムができたらいいなと思った。10年変わらず行くためには、変わっていくことが必要で、毎年毎年が良い場になるようにという思いをもって工夫し、できることを丁寧にやっていくことが大切だと感じた。

臨床心理学では、特に近年、社会的な専門性を確立していくことが求められているとされているものの、授業では制約もあって、どうしてもクローズになりがちな現状がある。そのような中で、この震災プロジェクトは外に開かれた、実践的な学びができる貴重な機会だった。臨床心理学の役割の1つとしての、専門家としての地域への貢献がどういうことなのかを学べたのはとても大きかったし、現地の支援者との協働や、教員や院生、卒業生、ハード面の準備をしてくださるスタッフたちと、これほど様々な人がかかわって作り上げる活動はないと感じた。

何かをできるようになること、技法を身につけることも大事だが、それだけでは一方通行になってしまう。それ以前に、場を丁寧に扱うこと、観察すること、関わり続けること、関心を持ち続けることを大切にしていきたいと思うようになった。プロジェクトにおいては、まずは現地のことを理解しようと努めること、そのうえで必要なことを考え、最大限できる準備を丁寧にして現地に赴き、できないことは他の人と協力していく、現地の様子に合わせて柔軟に対応していく。当たり前だが、支援者中心であってはならないということを学べたことは、とても大きなことだった。何をするか以前に、現地へどう入るか、いかに現地とつながるかが重要になってくることも、このプロジェクトに参加しなければわからなかったと思う。何をするかという「点」ではなく、行く前の丁寧な準備や行った後の振り返りも含めた「線」で臨床心理学の専門性をとらえることを学べたと思う。

社会人院生の参加が多かったが、現役生は目先のことに忙しいのもあって、直線的な学び、最短距離での学びに関心が向きがちだとも感じた。社会人は、一度社会に出ているので、社会と自分の繋がりを考え、社会の中での位置づけを捉えるということが学びとして身についているのかもしれない。その感覚を大学院で身につけるには、クローズな学びだけではなかなか難しい。そのためにも、臨床領域の院生にはぜひ参加してほしいプロジェクトだと思う。長く関わり続け、今年の学びが、来年の学びに繋がり、それが毎年毎年積み重なっていく。そのようなゆっくりとした関わりや学びも知っておくことが必要だと感じた。特に私は、原因―結果の最短距離が求められる世界で仕事をしてきたので、より大きな気づきになった。

サービス・ラーニングとしていくためには、プロジェクトに院生が関わる部分を多くしていくことが必要だと感じる。当日の参加だけでなく、プロジェクトの全体像を理解しようと努め、誰がどんな風に動いていて、プロジェクト全体が成り立っているのか理解したうえで、院生だ

からできること、やるべきことを考えていくことが必要ではないか。プロジェクトに関わるメンバー同士が、互いの得意分野、苦手分野を知ること。任され、任せられる信頼関係を築くこと。そのこと自体も大きな学びになっていくと思う。回り道のようで、ゆっくりとしか効果は見えないかもしれないけれど、そうやって癒され、回復し、立ち直っていく過程があること、そこに関わり続けるという支援のあり方があることを、このプロジェクトを通じて知ることができた。だから、私は大学院を修了しても、残り８年間、このプロジェクトに関わり続けていきたいと思う。

なお、院生たちの報告は高い関心で受け入れられ、2013 年 2 月 10 日の京都新聞にも紹介された。（資料参照）

院生アンケートを見ると、院生のプロジェクトへの参加姿勢がその成果と相関しており、コミットメントが高いと学びも深まっていた。とくに、現地に行く回数や研究会への出席、院生同士で語り合うなどが学びを深めていた。上述の院生の学びのナラティブにあるように、即効性を求めるより、時間をかけて熟成していく対人援助と学びができるような工夫が必要である。社会人院生も多いことから、それぞれの院生の動機や生活状況を考慮して自由度の高いものにしておく必要がある一方で、サービス・ラーニングとしての趣旨が理解できるように、導入に工夫が必要である。プロジェクトの全体を理解せず、スポット的な参加をした院生があったことは反省点である。2013 年度は、プロジェクト申し込み時に、参加意識を高め、学びを深めるためのサービス・ラーニング事前アンケートを実施することにした。

3.3　2013 年度のプロジェクト概要と院生たちの学び

2013 年度の参加人数は、院生 10 名、教員 8 名、職員 3 名、修了生 2 名だった。院生の内訳は、2 回目の参加者となる M2 が 3 名、M1 が 7 名、臨床心理学領域 6 名、対人援助領域が 4 名、社会人院生が 6 名、ストレートマスターが 4 名だった。岩手では同地点での開催は適わず、新たに宮古でのプロジェクト実施となった。9 月むつ、10 月多賀城、京都、11 月宮古、二本松、12 月福島でプロジェクト、6 回の報告会、2 月にシンポジウムを実施した。2013 年度のスケジュールは表 4 参照。

表４　2013 年度プロジェクトのスケジュール

2013 年 5 月 21 日	第 1 回研究会
7 月 3 日	第 2 回研究会
8 月 31 日～ 9 月 8 日	「東日本・家族応援プロジェクト in むつ」
10 月 1 日	第 3 回研究会・報告会
10 月 1 日～ 27 日	「東日本・家族応援プロジェクト in 多賀城」
10 月 10 日～ 13 日	「東日本・家族応援プロジェクト in きょうと」
10 月 16 日	第 4 回研究会・報告会
11 月 1 日～ 3 日	「東日本・家族応援プロジェクト in 宮古」
11 月 11 日～ 17 日	「東日本・家族応援プロジェクト in 二本松」
11 月 12 日	第 5 回研究会・報告会
12 月 1 日～ 8 日	「東日本・家族応援プロジェクト in 福島」
12 月 18 日	第 6 回研究会・報告会
2014 年 2 月 18 日	シンポジウム「災害後コミュニティのレジリエンスを引き出す支援とは」

事後アンケートに加え、プロジェクト開始にあたって事前アンケートを実施することにした。アンケートの質問項目は、1.参加予定地 2.このプロジェクトの意義をどのように捉えているか 3.参加目的とそれを達成するためにできること 4.被災地理解、対人援助の専門性、連携と融合、地域との協働、権利擁護（アドボカシー）の自己評価とさらに学びを深めるために必要だと思うこと、5.このプロジェクトをどのように活かしたいか6.その他で、記述によって、プロジェクト参加がより主体的な学びとなるように工夫した。

1）院生たちが捉えるプロジェクトの意義

事前アンケートから、参加を希望した院生たちが捉えているプロジェクトの意義を見てみると、全員が継続することの意味を重視しており、「復興支援ではあるが、現地へ足を運ぶことを通し、社会システムを捉えながら、ヒューマン・サービスについて考える学びの場の意義があるだろう」「大規模な自然災害が頻繁に起きている日本において、災害に直面した人々が、そこから生活を立て直していく際に必要な援助の方略を、実際にその人々と繋がり、経年による変化を当事者性で持って研究していくことは、心理臨床家として行う一般のクライエント理解の一助ともなると思われる」など、そこからそれぞれの目指す対人援助の専門家としての学びや成長につながるものとしての期待があった。また、

> 震災復興支援というと、一般的に直接的な支援が求められがちだったと思う。最初の１～２年はそのようなニーズも実際に強かったが、その後の支援はその土地に内在する課題に対応して行うべきではないかと捉えている。復興は外から起こすものではなく、内から起こすものと捉えると、その土地の中での動きを刺激するきっかけとなり、動きを支える機会となればと思う。本当に必要なのは、震災があってもなくても、ある種必要なことでもあることなのではないかと思っている。ただ、震災をきっかけにその課題が顕著に現れ、より深刻化している事態があるのではないか。そう考えると、その内からの力をエンパワーすること、その１つの手段がこの応用人間科学研究科の震災復興支援プロジェクトではないかと捉えている。

など、復興支援としての意義のフィードバックとも言える社会人院生ならではの記述もあった。

2）院生たちの参加目的

参加目的として挙げられていたものは、2012年度と同様、「専門家として成長」「ボランティアの継続」「風化への抵抗」があったが、「被災地への素朴な思い」は「被災地理解」に、「研究科のミッションへの共鳴」は「プロジェクトの意義への賛同」に変化していた。また、事前アンケートでは、それぞれの院生固有の物語が記述されたことが特徴的だった。以下にその一部を紹介する。

学校に勤めていたとき、震災が起きました。私は、マスコミを通してしか、現地の人の思いを知ることができませんでした。震災の起きた秋、東京のあるイベントに参加したとき、70代の福島のＡさんと知人を通して知り合いになりました。3.11のとき味わった思いを直接聞くことができ、「『津波の恐ろしさ』・『放射能汚染の不安』を抱えながら、地域の方と肩を寄せ合って暮らしている」ということでした。聞いていて、その思いを想像したとき、涙がこぼれました。その後、聞き取った内容を道徳の教材にして、生徒と共に学んでいきました。その方がおっしゃっていた「忘れないでほしい」をテーマにして。学習後、生徒のメッセージを福島に送り、それは地域の公民館に置かれ、現地の方々に読んでいただくことになりました。それからも、Ａさんや公民館の方と交流ができました。だから、自分の目で、福島を見ておきたいとずっと思っていました。（「ボランティアの継続」「被災地理解」）

私には、数年前に大きな事故で友人を亡くした経験があります。事故当時、その事故のニュースを耳にしない日はありませんでしたが、そのニュースも徐々に行われなくなってしまいました。私自身、事故が起きた後の数年間は事故現場を通ったり、事故が起きた日が近づくと憂鬱になる日があったりもしましたが、最近はそんなことも少なくなってきてしまいました。このことに良し悪しの判断を行うことが正しいかどうかはわかりませんが、事故の当事者や被害者、その家族などにとっては忘れることのできない過去であることは間違いがないように思います。事故や事件は風化してしまいますが、それを背負って、抱えて生きている人がいることを忘れたくない、そのような人たちの姿を知りたいと思い、参加を決意しました。（「風化への抵抗」）

まず、私自身が神戸出身であり、阪神淡路大震災の経験が根底にある。現地及びその土地の人は、被災地・被災者というくくりで捉えられるが、それがどこまでか誰もはっきりと捉えられない。そう考えると、様々な立場・環境で震災を経験した人がいて、それぞれに震災に対する捉え方がある。阪神淡路の経験から言うと、10年以上経って、ようやく向き合えた人もまわりに何人もいる。震災復興支援と考えた時に、どういう観点でそれに携わるのかを考え、初年度には、職場で震災支援プロジェクトを立ち上げ、そのプロジェクトの運営に携わった。その後は、京都での動きに関わっているのみであるが、また違った観点で震災復興支援及び対人

援助を捉えられたらと思い、参加を希望した。（「プロジェクトの意義への賛同」「ボランティの継続」）

これらは社会人院生のものであり、学習への動機が自己の物語の一部として語られるという成熟した学びを特徴づけているように思われる。

3）前年度の学びとの比較

事後アンケートにおける学びの自己評価を前年度と比較したものが図３である。被災地理解、連携と融合の２項目を除くと、院生たちの学びの自己評価は向上しており、基本的には、事前アンケートを記述することにより、自分自身の参加目的とサービス・ラーニングとして期待されている目的を明確化したこと、また、プロジェクトの趣旨について意識的に丁寧に説明するように工夫したことの成果が現れたものと考えられる。

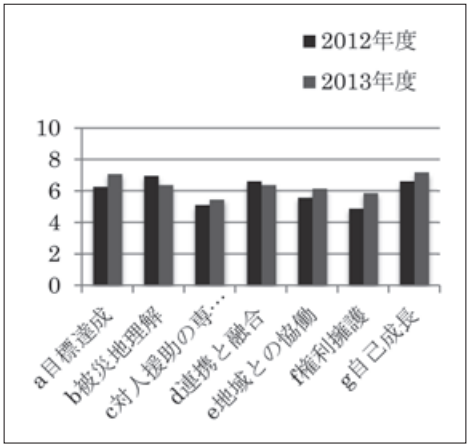

図３．院生による学びの自己評価

被災地理解については、被災地に触れ、現地の支援者、教員や他の院生たちと協働したことが理解を促進しており、現地でのプロジェクトに参加することができなかった２名は評価５と低く、一度でも現地に行くことが大きな意味を持っていることがわかる。他方、被災直後の生々しい場面に晒されて単純に衝撃を受けていた初期と異なり、地域や階層による復興の格差や原発をめぐる複雑な状況に、ごく一部を見ただけでは何もわかっていないという現実に気づき始めたと言えるかもしれない。合わせて「被災地とは何なのか?」というテーマが浮上してきた。

対人援助の専門性について、前年同様、評価の高いものとしては、対人援助職者が具体的に何をなすかより、どうあるかという点に重点が置かれており、評価の低いものとしては、「自身の目的が目撃者となることという部分に重点

を置いており、その場においての実践的な専門性が発揮されたとは言えない」など、自身の実践性や効果を基準にしたようである。他方、「現地の状況を捉えること、手段としてのプロジェクトの取り組みに触れ、理解を深めることはできたが、現時点では対人援助の視点から今回のプロジェクトを捉え直す、その過程にあると捉えている」「もともと対人援助職としてできることには限界があるように感じており、プロジェクトに参加した後もその考えに変わりはない。援助の対象とされる人が課題に取り組むときに背中を押したり、支えたりするのが援助職の役割なのではないかと考えている。具体的に対人援助職としてどうあるべきなのか、何ができるのか、対人援助職である理由はあるのかなどについて明確な答えは出ていない」などのように、新たな問いや洞察の記述が見られ、そこにこそもっとも専門性があるとも考えられる。

連携と融合に関する肯定的評価は、現地スタッフを含むチームでの協働によるが、その意義は認識したものの、まだ理解が不十分ではないか、とくに融合についてはもっと経験を重ねることが必要だという声が多かった。現地での反省会を通じて、このプロジェクトを成り立たせている眼に見えにくい労力に気づき、準備を含め全体としてのプロセスにも、もっと主体的に関わるべきだったという反省が複数見られた。実際、現地との関係において、2013年度になると、院生や修了生の自主的な動きが現れてもいる。

地域との協働は、もっとも大きく上昇した。現地の協力者たちとの交流や協働を通じて理解が深まっており、回を重ねるにつれて地域との信頼関係が強化されていることを反映しているのかもしれない。「いくつかの土地では、これ以降も継続されるような繋がりが構築できているように思える一方で、未だにこちらが部外者、あるいはお客様であるような関係があるように思える」という声もあった。

権利擁護（アドボカシー）も前年を大きく上回ったが、プロジェクトを通して、権利擁護（アドボカシー）について丁寧に語るようにしたことの成果だと思われる。しかしながら、記述内容は、「常に権利擁護の観点から捉えてはいないが、やってきたことを発信していく際には、この観点の必要性を感じている。関わる対象となるもの、今回は被災地とされる現地や住民・支援者の環境がよりよくなるような働きかけの必要性は感じるところである。やってきたことの意義

を問い直し、対象者にとっての意味も問い直した上で、発信するプロセスを持ち続けたい」など、権利擁護（アドボカシー）を理解したというより、考える視点として重要であることを認識したというものが多かった。

自己成長では、「今回のプロジェクトに参加したことによって、臨床心理学に必要な当事者の目線や、社会システムの考えなど自分がまだまだ身に付けていないことがたくさんあったことに気づくことができた。また、以前は震災について興味はあるが何も行動に移すことができなかったが、今回のプロジェクトに参加したことによって他の活動にも参加してみようという気持ちが芽生えた。以上のように、自分の未熟な部分を把握できたことや、こうした活動への参加意欲が芽生えたことが自己成長ではないかと考える」など、それぞれの意味づけが記述された。目標達成とパラレルな関係にあり、院生たちは本プロジェクトにもっとも自己成長を期待しているのかもしれない。

4）院生たちによるプログラム評価

プログラム評価は、5 点満点で、　①後輩に勧めるか 4.4 から 4.3 へ　②もう一度参加したいか 4.3 から 4.2 へ　③成長に役立ったか 4.4 から 4.5 と、ごくわずかに減少したが、前年同様、概ね満足度の高い結果が得られたと言える。成長に役立ったかどうかは上記の自己成長を反映しているだろう。

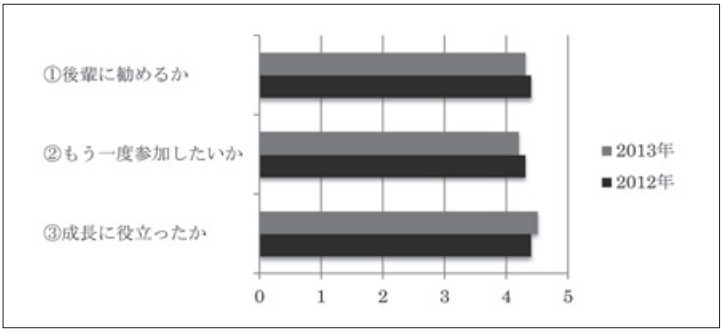

図４　院生たちによるプログラム評価

「一つの援助をするには、かなりの覚悟とそれを楽しむ気持ちと責任感が必要だと気づいた」という側面と、それだけに時間やエネルギーなどコミットメントが求められ、時間的制約のある臨床心理学領域の院生や社会人院生において、実際には現実的な制約から被災地に行くことが難しいことも考えられるので、自分には良かったが、本人の目的次第ではないかという声が複数あった。他方、被災地に行くことはできず報告会だけの参加であっても学びが大きかった、プロジェクトに参加していない院生ももっと報告会に参加できるようにしてはどうか、さらに、報告会だけでなくもっと深く語り合えるような場があれば、また、報告会だけでなく授業形式での学びも展開できるのではないかという示唆もあった。

5）院生の成果報告の評価

2013年度も2月にシンポジウムを開催し、被災地で活躍している支援者たちの話題提供を受けて議論する機会を持つとともに、3名の院生がサービス・ラーニングとしての成果報告を行った。この院生の報告を聞いた第三者によるアンケートによって評価してもらうことにしたが、実際には回収率が悪く8名のみの回答となった。

「サービス・ラーニングという学習の形態として練られたものであると思いますか」「院生たちの報告からサービス・ラーニングが何であるかについて理解できましたか」「プロジェクトそれ自体が社会貢献していた様子が理解できたか」の項目に関しては、全員が「そう思う」「ややそう思う」と回答した。「院生の報告にそくして対人援助活動の重要点である他職種連携はよく可視化されていたか」には2名が、「その活動は地域との協働ができていたか」には1名が、「その活動から社会的に解決すべき問題がよくみえてきたか（権利擁護の視点）」には3名が「ややそう思わない」と回答しており、「まったくそう思わない」はなかった。

また、「サービス・ラーニング・プログラムとして4つの目標（①現地の人が直面している課題、状況を説明することができる　②現地で見聞きした状況について学術的理論を交えて説明することができる　③震災プロジェクトでの経験により各自の研究テーマを深めることができる　④報告会で現地での経

験、考えを報告することができる）は達成できていたと思いますか」については、「そう思う」「ややそう思う」が7名であり、総体的には一定の評価が得られたものと考えられる。「大学院教育としてのサービス・ラーニングとしての本プロジェクトについて改善すべき点」についての記述はとくになく、「学部生も参加したい、活用して欲しい」との声が挙げられていた。

院生の報告を誰に向けて行い、どのような形で評価してもらうべきかについては、まだまだ検討の余地があると言えるだろう。

プロジェクトから3年を経て、ようやくサービス・ラーニングとしての形を整えることができつつある。学びの深さはコミットメントと相関する一方、現地に行くことができなくても学びはあり、院生の生活や目的に合わせて、参加の仕方に選択肢をもたせることが重要であると考えられた。院生がもっと主体的に動ける可能性を開いていく必要もあるが、現地との関係を考慮すると、教員による十分なフォローが求められる。2014年度より、プロジェクトの一部を正課の実習として位置づけるとともに、ボランティアとして自由度の高い参加の仕方ができる選択肢を残すことにした。本人の目的に応じて利用できるプログラムにすること、院生の自主的な動きを促進すること、院生同士で体験を共有し語り合う場が増えるよう工夫していきたい。

大きく残された課題は、サービスの受け手である現地での協働者たちや利用者たちからどのように評価を受けるかである。これまでのところ、現地でのアンケートを取っており、一定の評価を受けているものの（毎年85%強が「とても良かった」「良かった」と応えており、「良くなかった」とするものは1%以下である）、その評価がどの程度、実際の評価を反映しているのかは明確ではない。

もうひとつの課題は、プロジェクトに参加していない院生たちにこれがどのような影響を与えているのかである。毎年、入学式オリエンテーション時と全員を対象とした初期の授業において、プロジェクトの報告をしている。報告会やシンポジウムは公開のものであり、HPでの報告も研究科HPに随時更新されている。院生たちは日常的に体験を語り合っており、個別に共有している側面もある。しかしながら、プロジェクト参加者以外が報告会に参加することはそれほど多くない。

2014年度のプロジェクトもスタートした。院生たちの自主勉強会も立ち上がり、今年度のプロジェクト参加者は32名となった。これまでは、現地での実施体制やサービス・ラーニングとしての形を整えることに大きなエネルギーを取られてきたが、4年目となる本年は、これまでの成果を振り返り、情報発信を行うと同時に、今後の参加院生が共有できる財産とするべく、出版準備中である。

4　今後に向けて

今回の結果を再評価し直すならば、対人援助に関わる現場での実践を学ぶと同時に、対人援助職者としての価値や姿勢を学ぶという点においては概ね期待に応えた結果となったが、なお不十分であり、今後の課題として挙げられることは、プロジェクト全体の理論化であろう。対人援助職者養成の大学院教育において、特定の援助領域や技法に特化せず、とくに復興という全体性と関わるテーマをもつ事項についての教育方法開発へとこのプロジェクトの成果を理論化する作業が不可欠である。

本プロジェクトは、①支援者支援、②地域との協働、③レジリエンスモデルという普遍的な実践指針をもとにして、ヒューマン・サービス分野の学びの意欲、関心、動機を高次化していくプロジェクトであり、復興の証人になるという持続的過程をもとにすることで、地域の変化、自己の変容、日常の回復を同期させるという特性を持つ。現地のニーズを上記の3点にそくして確定し、それをプログラムとして編成し、協働しながら院生が参画するという経過の全体を省察しつつ持続させるという連環がこのプロジェクトの核心でもある。これらをもとにした教育方法開発のための理論化を通して、細分化、専門化がすすみ、当事者の視点を後景に退けがちな、そして社会的歴史的経済的なマクロ的視野が欠落していく傾向や技法の学びに矮小化されがちな対人援助職者養成の教育を再考していく契機としたい。

おわりに

プロジェクト型の学びが意図すること
ー問題解決だけではなく「問い」を再構成できる力を養う

1.　研究科のミッションとかかわってのプロジェクト型の学び

応用人間科学研究科は、対人援助や支援、臨床実践に関わる諸領域を対象としている。方法論も多様である。しかし、学知が優先するのではなく、そこに生きる人たちや生きる場がよりよくなることを重視し、問題の認識、問題の定義、方法論の刷新・反省等を重視した教育・研究を構築したいと考えてきた点は強調されるべきだろう。単純に「援助する側とされる側」をそこに想定することの克服はもちろんのこと、では両者の関係はどうあるべきなのかについても考えてきた。その「あいだ」を解きほぐし、再構成し、当事者のQOLの向上、権利の擁護・実現が果たされていくこと、さらに同時に、諸実践の洗練と実践家の倫理、責任、そして実践者と当事者の権利を満たされたものとする一連の作業が共有できることを大切にしたいと考えてきた。

これらの作業は複雑な手続きを必要とする。その過程において、既存の概念を批判的に吟味し、日常的な生活環境の改善から社会再構築にも至るべき、ミクロとマクロがリンクする「結節点」となる取り組みをプロジェクトとして設定して、学びの工夫を試みている。震災プロジェクトとそこに組み込んだサービスラーニングはその具体化である。

2.　複合的な震災に遭遇して

立命館大学の法科大学院と応用人間科学研究科が協同で「司法臨床」という科目を開設している。「法と心理」という具合に連携していく領域が多くなっていくことを想定した科目展開である。弁護士と心理士の協同科目だ。法化社会は人間科学領域と連携してニーズがでてくることになる。また、教育、看護、福祉、医療と家族の関連は日本社会では無視できない。家族的なものや擬似的

家族も入れるとさらに広がる。発達障害の課題も同じく多様な分野の連携を要請している。臨床と支援の制度設計には公共政策領域との連携が要る。これらは「連携と融合」として位置づけた応用人間科学研究科のミッションの具体化である。

いくつかあるプロジェクト型の学びはクラスターとはまた異なる「連携と融合」の具体化である。学びのかたちはサービスラーニングとして位置づけている。この学びをとおして得て欲しいことは次のようなことである。対人援助や支援、臨床と実践のフィールドには「問題」が山積しており、専門家や臨床の知は「問題解決」を期待される。しかし他方で、学問の問いとしては、単純に答えがでない問いや「問題」の再定義をも視野に入れる必要がある。

対人援助の諸領域は資格が多様にあるが、それは当事者とともに、家族とともに、地域の実情にあわせて当意即妙に柔軟なあり方をも必要とする課題や特性もあり、かなりの程度にアート arts としての臨床や支援が、サイエンス（エビデンスとしての science）とともに求められることとなる。この両面を大学院教育に落とし込んで社会の緊急の問題解決領域と接合した。この両面があるからこそ、問題の再考や問いそれ自体の問い直しが可能になる。複合的な震災だった 3.11 は、既存の支援や復興の理論それ自体が試練にさらされることになる。そうした全体像を学びたくて、10 年持続させることとした。

3.　社会問題と格闘する支援と臨床をめざして

3.11 は、問いそれ自体を問い続けることや「問題」の再考それ自体もできる人を育てることを要請している。問題解決型の知では狭いともいえる。答えのない「問い」を自分で立てることができる程に問題解決思考を重ねて、これまでの暮らし方それ自体を「問い」、再構成できる力を養いたいと願った。社会の中にそんなにシャープに答えがあるわけでないからである。その答えも別の問題をはらんでしまうということもみえてきた。「問題解決行動が問題となること」や「偽問題解決行動」を指摘してきた臨床の方法に学ぶと、応用人間科学研究科で扱うことそれ自体もこうした思考のループに組み込まれるべきだ。明確な答えがないからこそ、逆に、新たに「問い」をたて、それを調べ、言

語化し、臨床と支援の実践の場をつくりながら、「問いを問う知を」構築する。解決すべき問題を生起させるもうひとつ大きな問題それ自体への問いを含んだ次元の異なる解法を探求したいと願っている。社会のあり方へと再帰させるという問題解決行動を知的に行えることは、それなりのレベルが高い作業なので大学院に相応しいと思う。問題解決を指向するのが臨床と支援の入り口だが、答えだけだと対処療法となる。「問い」を立て直すこともできるようになりたい。「問題解決型の知」は物事のある一面である。こうして、臨床の知から既存の概念の再考を迫るテーマはたくさん生成しているのでそれをひきうけるものとしてプロジェクト型の学びがある。

応用人間科学研究科を開設した社会的背景のひとつには、1995 年の「阪神淡路大震災」がある。私の研究領域（社会病理学）ではオウム真理教事件もあり、さらにテロとの闘いなのか不安と恐怖との闘いなのか不明となっているアメリカ合衆国の 9.11 もあった。社会的なトラウマとなる出来事群である。90 年代にかけてこんなことを考えながら、応用人間科学研究科を作ったのが 2001 年だ。こうした経過にある応用人間科学研究科としては、3.11 をどう研究科の教育と研究に活かすべきなのかという展開は必然だった。10 年続けていくことと大学の本来的な機能に即して貢献することを軸にしてその必然を具体化してきたことの軌跡がこの冊子に詰まっている。まだまだ復興は続く。応用人間科学研究科の努力も続く。

2015 年 1 月 31 日　中村　正

ほっと、リラックスの表情で

対人援助学から

被災者支援報告

中京でシンポ

「東日本大震災シンポジウム 東日本大震災と対人援助」が10日、京都市中京区の立命館大朱雀キャンパスで開かれた。写真。社会学や臨床心理学など複合的な視点を通じて人を支援する「対人援助学」を学ぶ学生が、東北4県で実施したプロジェクトを報告し、必要な支援策や今後の課題を話し合った。

立命大大学院応用人間科学研究科が主催。対人援助学の観点から必要な支援を探っ

し、会場には約60人が参加した。

同研究科は、東北地方で教員やソーシャルワーカーらを支援するセミナーや体験講座を2011年5月から開催。対人援助学の観点から必要な支援を探っている。

シンポでは、プロジェクトに参加する学生13人が報告した。被災地で取り組んだ子ども向けのカレンダー作りが広がっている例を示し、「被災者が必要とする支援」を引き出す支援が重要だ」と話した。

がれき撤去など直接的な働きかけだけではなく、1年の藤原佳世さんは「何かを渡すというのではなく、被災者の力を引き出す支援が重要だ」と話した。

（空都彩）

●2013年2月11日京都新聞

2013 年度震災復興支援プロジェクト事前アンケート

応用人間科学研究科　　領域　　回生
名前＿＿＿＿＿＿＿＿＿
メールアドレス＿＿＿＿＿＿＿＿＿

1.　参加希望に〇をつけてください。

	日付	プロジェクト	参加希望の有無
1	9 月 5 日～7日	東日本・家族応援プロジェクト 2013 in むつ	
2	10 月 4 日～6日（交渉中）	東日本・家族応援プロジェクト 2013 in 宮城（多賀城）	
3	10 月 12 日～13 日（交渉中）	東日本・家族応援プロジェクト 2013 in きょうと	
4	11 月 2 日～3 日（交渉中）	東日本・家族応援プロジェクト 2012 in 岩手（大船渡？）	
5	11 月？日	東日本・家族応援プロジェクト 2012 in 二本松	
6	12 月 7 日～8 日（交渉中）	東日本・家族応援プロジェクト 2012 in 福島	

2. このプロジェクトの意義について、あなたはどのように捉えていますか。

3. プロジェクトに参加した動機・目的について

（1）このプロジェクトに参加したあなたの動機・目的を教えてください。

（2）その動機・目的を達成するために、あなた自身、どんな工夫や努力ができると思いますか？

3. 被災地の状況理解について

（1）あなたは、現時点で、どの程度、被災地の状況理解ができていると思いますか？被災地としてどこを指すかはあなたなりの理解で構いません。 1を「まったく理解できていない」、10を「最大限に理解できている」とした場合、その理解度は下記のスケールの1から10までの何点にあたると思いますか。丸をつけてください。

1　2　3　4　5　6　7　8　9　10

（2）なぜそう思いますか。

（3）このプロジェクトを通じて、その数字を1つあげるためには、何が必要だと考えますか。

4. 対人援助の専門性について

（1）あなたは対人援助の専門性についてどの程度理解できていると思いますか。1を「まったく理解していない」、10を「最大限に理解している」とした場合、その達成度は次のスケールの1から10までの何点にあたると思いますか。丸をつけてください。

1　2　3　4　5　6　7　8　9　10

（2）なぜそう思いますか。

（3）このプロジェクトを通じて、その数字を1つあげるためには、何が必要だと考えますか。

5. 連携と融合について

（1）あなたは、連携と融合についてどの程度、理解していると思いますか。1を「まったく理解できていない」、10を「最大限、理解している」とした場合、下記のスケールの1から10までの何点にあたると思いますか。丸をつけてください。

1　2　3　4　5　6　7　8　9　10

(2)なぜそう思いますか。

（3）このプロジェクトを通じて、その数字をもう1つあげるためには、何が必要だと考えますか。

6. 地域との協働について

（1）あなたは、地域との協働についてどの程度、理解していると思いますか？1を「まったく理解していない」、10を「最大限、理解している」とした場合、下記のスケールの1から10までの何点にあたると思いますか？丸をつけてください。

1　2　3　4　5　6　7　8　9　10

（2）なぜそう思いますか。

（3）プロジェクトを通じて、その数字を1つあげるためには、何が必要だと考えますか。

7. 権利擁護（アドボカシー）について

（1）あなたは、権利擁護（アドボカシー）についてどの程度、理解していると思いますか？ 1を「まったく理解していない」、10を「最大限、理解している」とした場合、下記のスケールの1から10までの何点にあたると思いますか？丸をつけてください。

1　2　3　4　5　6　7　8　9　10

（2）なぜそう思いますか。

（3）プロジェクトを通じて、その数字を1つあげるためには、何が必要だと考えますか。

8. その他

（1）あなたは、このプロジェクトで学んだことをどのように活かしたいと思いますか。

（2）その他のコメント、ご意見など自由に記述してください。

※サービスラーニングの成果報告をするさいに、このアンケートを匿名で紹介することがあります。差し障りがあれば、その旨、記入してください。

ご協力ありがとうございました。

2013 年度震災復興支援プロジェクト参加院生に対する事後アンケート

応用人間科学研究科　　領域　　回生
名前＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

2.　参加したものに〇をつけてください。

	日付	プロジェクト	参加の有無
1	5 月 21 日	震災復興支援プロジェクトのための説明会	
2	7 月 3 日	震災復興支援プロジェクトのためのミーティングおよび研究会 2	
3	8 月 31 日から 9 月 8 日	「東日本、家族応援プロジェクト 2013 in むつ」	
4	10 月 1 日	震災復興支援プロジェクトのためのミーティングおよび研究会 3	
5	10 月 16 日	震災復興支援プロジェクトのためのミーティングおよび研究会 4	
6	10 月 1 日から 27 日	「東日本・家族応援プロジェクト 2013 in 多賀城」	
7	10 月 10 日から 13 日	「東日本、家族応援プロジェクト 2013 in きょうと 」	
8	11 月 1 日から 3 日	「東日本・家族応援プロジェクト 2013 in 宮古」	
9	11 月 12 日	震災復興支援プロジェクトのためのミーティングおよび研究会 5	
10	12 月 1 日から 8 日	「東日本・家族応援プロジェクト 2013 in 福島」	
11	12 月 18 日	震災復興支援プロジェクトのためのミーティングおよび研究会 6」	

2. このプロジェクトの意義について、あなたはどのように捉えていますか。

3. プロジェクトに参加した動機・目的について
（3）このプロジェクトに参加したあなたの動機・目的を教えてください。

（4）その動機・目的はどの程度、達成されましたか？　1を「まったく達成されなかった」、10を「最大限に達成された」とした場合、その達成度は下記のスケールの1から10までの何点にあたると思いますか。

1　2　3　4　5　6　7　8　9　10

（5）なぜそう思いますか。

（4）その数字を1つあげるためには、何が必要だと考えますか。

4．被災地の状況理解について

（1）このプロジェクトに参加したことによって、あなたは被災地の状況理解を深めることをどの程度達成できましたか。 1を「まったく達成されなかった」、10を「最大限に達成された」とした場合、その達成度は下記のスケールの1から10までの何点にあたると思いますか。

1　2　3　4　5　6　7　8　9　10

（2）なぜそう思いますか。

（3）その数字を1つあげるためには、何が必要だと考えますか。

5. 対人援助の専門性について

（2）このプロジェクトに参加したことによって、あなたは対人援助の専門性を深めることをどの程度達成できましたか。1を「まったく達成されなかった」、10を「最大限に達成された」とした場合、その達成度は次のスケールの1から10までの何点にあたると思いますか。

1　2　3　4　5　6　7　8　9　10

（2）なぜそう思いますか。

（3）その数字を1つあげるためには、何が必要だと考えますか。

6. 連携と融合について

（1）このプロジェクトに参加したことによって、あなたは、連携と融合について理解を深めることをどの程度達成できましたか。1を「まったく達成されなかった」、10を「最大限に達成された」とした場合、その達成度は下記のスケールの1から10までの何点にあたると思いますか。

1　2　3　4　5　6　7　8　9　10

（3）なぜそう思いますか。

（3）その数字をもう1つあげるためには、何が必要だと考えますか。

7. 地域との協働について

（1）このプロジェクトに参加したことによって、あなたは、地域との協働について理解を深めることがどの程度達成できましたか。1を「まったく達成されなかった」、10を「最大限に達成された」とした場合、その達成度は下記のスケールの1から10までの何点にあたると思いますか。

1　2　3　4　5　6　7　8　9　10

（2）なぜそう思いますか。

（3）その数字を1つあげるためには、何が必要だと考えますか。

8. 権利擁護（アドボカシー）について

（1）このプロジェクトに参加したことによって、あなたは、権利擁護（アドボカシー）について理解を深めることがどの程度達成できましたか。1を「まったく達成されなかった」、10を「最大限に達成された」とした場合、その達成度は下記のスケールの1から10までの何点にあたると思いますか。

1　2　3　4　5　6　7　8　9　10

（2）なぜそう思いますか。

（3）その数字を1つあげるためには、何が必要だと考えますか。

9. 自己成長について

（1）このプロジェクトに参加したことによって、あなた自身はどの程度、成長したと感じますか。1を「まったく達成されなかった」、10を「最大限に達成された」とした場合、その達成度は1から10までの何点にあたると思いますか。

1　2　3　4　5　6　7　8　9　10

（2）なぜそう思いますか。

（4）その数字を1つあげるためには、何が必要だと考えますか。

10.　プロジェクトについての評価

（1）あなたは、このプロジェクトを後輩に勧めたいと思いますか。5つの中から選んで○をつけてください。

まったくそうおもわない　そうおもわない　どちらともいえない　そうおもう　まったくそうおもう

あなたは、このプロジェクトにもう一度参加したいと思いますか。5つの中から選んで○をつけてください。

まったくそうおもわない　そうおもわない　どちらともいえない　そうおもう　まったくそうおもう

全体として、このプロジェクトはあなたの成長に役立ったと思いますか。5つの中から選んで○をつけてください。

まったくそうおもわない　そうおもわない　どちらともいえない　そうおもう　まったくそうおもう

（2）なぜそう考えましたか。

（3）このプロジェクトについて良かった点、また改善すべきだと考える点があれば、できるだけ具体的に記述してください。

11. その他

（1）あなたは、このプロジェクトで学んだことを今後、どのように活かしたいと思いますか。

（2）その他のコメント、ご意見など自由に記述してください。

※サービスラーニングの成果報告をするさいに、このアンケートを匿名で紹介することがあります。差し障りがあれば、その旨、記入してください。

ご協力ありがとうございました。

「東日本・家族応援プロジェクトの取り組み
ーサービスラーニングの観点から」アンケート

サービスラーニングは日本の教育では比較的新しい取り組みです。教育実習、福祉実習、看護実習などの資格要件にかかわる法定科目型の実習教育、企業や諸団体等でインターンをおこなうタイプの実習、調査を目的としたフィールドワーク、大学が仲介するボランティア実践とも異なります。このプログラムを実施している立命館大学大学院応用人間科学研究科の英文名称は Graduate School of Science for Human Services としています。ここでは主要には公私問わず提供され実践されている多様な形態での対人援助活動を総称してヒューマンサービスとしています。こうした意味でのヒューマンサービスともかかわる領域における新しい教育の取り組みとして位置づけたプロジェクトに関わりながら学ぶというのがこの取り組みです。

サービスラーニングが盛んな北米や欧州では以下のように位置づけています。「サービスの提供者と受け手 (人間、社会、環境) の両方の変化を意図して、サービスの目標と学習目標を結びつける取り組みである。それは、自己の振り返りと自己発見、そして価値観・技能・知識の獲得、理解と社会課題の解決を果たす体験が同時に果たされるように良く練られたプログラム」（National Service-Learning Clearinghouse）」とされています。

応用人間科学研究科のプロジェクトの目的としては、参加した院生が、「①現地の人が直面している課題、状況を説明することができる、②現地で見聞きした状況について学術的理論を交えて説明することができる、③震災プロジェクトでの経験により、自分の研究テーマを深めることができる、④報告会で現地での経験、考えを報告することができる」ことをめざしています。

このプロジェクトはサービスラーニング実践についての評価の仕方についても工夫を重ねていきたいと考えています。以下のアンケートにこうした観点から是非ご協力いただければ幸いです。

①このプロジェクトが上記のような意味でのサービスラーニングという学習の形態として練られたものであると思いますか。

１そう思う　２ややそう思う　３ややそう思わない　４そう思わない

②院生たちの報告からサービスラーニングが何であるかについて理解できましたか。

１そう思う　２ややそう思う　３ややそう思わない　４そう思わない

③院生の報告にそくして以下の諸点はどの程度うかびあがっていたでしょうか（一人ひとりの院生報告ではなく全体としての感想をお聞かせください）

１）対人援助活動の重要点である他職種連携はよく可視化されていたか

１そう思う　２ややそう思う　３ややそう思わない　４そう思わない

２）その活動は地域との協働ができていたか

１そう思う　２ややそう思う　３ややそう思わない　４そう思わない

３）プロジェクトそれ自体が社会貢献していた様子が理解できたか

１そう思う　２ややそう思う　３ややそう思わない　４そう思わない

４）その活動から社会的に解決すべき問題がよくみえてきたか（権利擁護の視点）

１そう思う　２ややそう思う　３ややそう思わない　４そう思わない

④サービスラーニングプログラムとして４つの目標は院生報告から総体として達成できていたと思いますか。

「①現地の人が直面している課題、状況を説明することができる、②現地で見聞きした状況について学術的理論を交えて説明することができる、③震災プロジェクトでの経験により各自の研究テーマを深めることができる、④報告会で現地での経験、考えを報告することができる」

１そう思う　２ややそう思う　３ややそう思わない　４そう思わない

⑤大学院教育としてのサービスラーニングとしての本プロジェクトについて改善すべき点がありましたら具体的に記述してください。

2015年2月14日発行

発　行　**立命館大学大学院**
応用人間科学研究科
村本邦子
中村　正

〒603-8577　京都市北区等持院北町56-1
Tel:075-466-3144

●応用人間科学研究科　http://www.ritsumei.ac.jp/acd/gr/gsshs/
●震災復興支援プロジェクト　http://www.ritsumei.ac.jp/acd/gr/gsshs/sinsaiproject.html